令和６(2024）年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業（派遣）

Tottori Prefecture - Vermont Youth Exchange Program 2024

派遣生徒　レポート

鳥取県

令和６(2024) 年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業（派遣）

○趣旨・目的

鳥取県と姉妹提携を結ぶ米国バーモント州へ県内の青少年を派遣し、青少年同士の交流を通して、互いの教育、文化、生活習慣等の違いを理解することで、国際的視野を持った青少年の育成及び、両地域の更なる交流促進を図ることを目的としています。

派遣においては、異文化理解をはじめ、自然環境や社会環境の分野から日ごろ興味や関心をもつテーマを生徒自身で設定し、それを念頭に現地で比較しながら疑問点を掘り下げることにより理解を深め、派遣後は本事業の経験を活かし、将来、広い視野をもって鳥取県の持続可能な地域社会づくりへ貢献しうる人物の参加を期待します。

○実施主体・現地受入団体

（１）実施主体

鳥取県（以下「県」という）

（２）現地受入団体

バーモント州の非営利団体 Green Across the World（以下「GATW」という）

○派遣期間

令和６年１０月４日（金）～１５日（火）

○派遣者

計１１名

県内高校生８名、引率３名

○派遣者名簿

	学校名	学年	生徒氏名	派遣先高校
1	青翔開智高等学校	1	チャールズ　義伸波音レオ	バーリントン高校
2	鳥取西高等学校	2	安治　智成	バーリントン高校
3	米子工業高等専門学校	2	實近　はるの	バーリントン高校
4	米子松蔭高等学校	2	川島　優里	エセックス 高校
5	米子高等学校	2	佐藤　優	バーリントン高校
6	米子北斗高等学校	2	金子　真実	バーリントン高校
7	米子東高等学校	2	前田　蒼衣	バーリントン高校
8	米子西高等学校	2	角　乙葉	バーリントン高校
9	引率	2	福田　芽生	
10	引率	2	入江　文子	
11	引率・通訳	2	ジェマ・リー・ウォルッシュ・ブラウン	

○日程概要

	プログラム	宿泊
１日目 （金）	午前　鳥取空港、又は米子空港発 　　羽田空港よりアメリカへ出発 夜　　バーリントン州到着（バーリントン空港着）	 ホームステイ
２日目 （土）	午前　ホストファミリーと交流 夕方　オリエンテーション及び歓迎パーティ	 ホームステイ
３日目 （日）	終日　ホストファミリーと交流	 ホームステイ
４日目 （月）	終日　キーピングトラック（野外調査）	 ホームステイ
５日目 （火）	終日　シャドーイング（高校体験）	 ホームステイ
６日目 （水）	午前　果樹園、市役所視察 午後　採石場視察	 ホームステイ
７日目 （木）	午前　鳥博物館、野生生物保護機関訪問 午後　バーモント州施設視察	 ホームステイ
８日目 （金）	午前　バーモント大学、ルーベンスタインセンター視察 午後　シャンプレイン湖環境調査船	 ホームステイ
９日目 （土）	終日　ホストファミリーと交流	 ホームステイ
１０日目 （日）	日中　ホストファミリーと交流 夕方　研修発表　送別会	 ホームステイ
１１日目 （月）	早朝　バーリントン州出発（バーリントン空港発） 経由地で乗り継ぎ	 機内泊
１２日目 （火）	午後　成田空港着、夕方　羽田空港発 夜　　鳥取空港、又は米子空港着	

○派遣レポート　<以下の名簿順にレポートを掲載します>

	学校名	学年	生徒氏名	派遣先高校
1	青翔開智高等学校	1	チャールズ　義伸波音レオ	バーリントン高校
2	鳥取西高等学校	2	安治　智成	バーリントン高校
3	米子工業高等専門学校	2	實近　はるの	バーリントン高校
4	米子松蔭高等学校	2	川島　優里	エセックス高校
5	米子高等学校	2	佐藤　優	バーリントン高校
6	米子北斗高等学校	2	金子　真実	バーリントン高校
7	米子東高等学校	2	前田　蒼衣	バーリントン高校
8	米子西高等学校	2	角　乙葉	バーリントン高校

令和 6 年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業（Tottori-Vermont Youth Exchange）*1 参加レポート

青翔開智高校、1 年生、チャールズ義伸波音レオ

・自然環境テーマ「メープルシロップと地球温暖化の関係性について」
・社会環境テーマ「アメリカ・バーモント州の多様性と共生」

10 月 4 日から 14 日の計 10 日間をアメリカ・バーモント州で過ごした。その研修で学んだことを自然環境、社会環境の 2 つのテーマから振り返ってみた。また、その他現地で出会った人達、個人的に感じたこと、そして日本との違いについても紹介したい。

まず、僕が設定した「メープルシロップと地球温暖化の関係性」というテーマについては深く研究することはできなかった。というのは国際交流推進を目的に活動している Green Across The World *2 という現地の NPO 団体が事前にプログラムを組んでくれていたからである。主な活動そして視察先を紹介すると、バーモント州議会議事堂、バーモント州立大学ルーベンスタイン環境・自然資源学部 Aiken Center、また琵琶湖より 2 倍大きく、南端はニューヨーク州、北端はカナダのクベック州に位置するバーモント州で一番大きいシャンプレイン湖（Lake Champlain)で環境調査船 Melosira 内の水質調査活動にも参加させてもらった。またシャンプレイン湖（ニューヨーク州に近い辺り）のすぐ東側にあるバーモント州で最も古い果樹園の 1 つであるシャンプレイン果樹園（Champlain Orchard)ではりんご狩りをし、オーガニック栽培認定されている 30 種類ほどのりんごを見せてもらった。

滞在中は受け入れ高校であるバーリントン高校（Burlington High School)とエセックス高校（Essex High School)の 2 校の生徒たちの代表と一緒に活動した。これらの充実したプログラムを通じて予想以上に様々なことを学ぶことができた。特に印象に残った野外調査プログラムである Keeping Track*3 について以下に詳しく説明する。

このプログラムでは森を形成している生態系について学んだ。10 月 7 日にジェリコ山(Mt. Jericho)そして 3 日後の 10 月 10 日にはファイロ山（Mt.Philo）に登り、1 日中森の中で調査を行った。この Keeping Track というプログラムの考案者であり、また生物学者である Susan Morse（スーザン・モース）先生ご自身が案内してくれた。彼女の説明を聞

きながらひたすら山を歩いた。生物学者である彼女は最初に登った Mt.Jerico のすぐ近くに住んでいて、自然を愛していることが全身から感じられる方だった。山を歩いていく中で、ボブキャットとブラックベア（ツキノワグマ）を中心に色々な話をしてくれた。

ボブキャットは、どのように狩をするか、またどのように外敵から逃れるかなど長年の調査を踏まえた上での説明はとても興味深かった。ボブキャットという動物自体日本では生息しておらず、初めて知った動物だった。イメージとしては、森の中で生活している野生の大型の猫と想像してもらえたらいいと思う。また、ツキノワグマは日本でも聞いたことがあったので、ボブキャットと比べて身近に感じたが、自分の想像を超える発見と気づきがあった。1 番僕が驚いたのは、春ごろの体重と比べて冬眠前には体重を約 3 倍に増やすことだ。それに加えて、バーモント州に生息しているツキノワグマは木の実などを主な食物としているので、冬眠前の時期になると 1 日に何千粒の木の実を食べるそうだ。また、日本に生息しているツキノワグマなどのクマとの比較もしてくれ、より理解を深めることができた。ボブキャットとツキノワグマに共通して言えることは、お互いにマーキングの方法が同じだということ。ボブキャットの場合、隠れ家になりうるところを自分の体をその場に擦り付けて行う。クマの場合、木を引っ掻いて自分の爪痕を残したり、ボブキャットと同様、体を木に擦り付けるそうだ。Keeping track の活動中に見せてもらった写真で、親熊が巨体を揺らしながら、マーキングする姿がとても印象深い。どちらの動物のマーキングの目的も共通していて、自分の位置を伝えるため、縄張りを明確にするため、新たな家族を見つけるためなどだった。

実際にボブキャットがマーキングをしている岩との写真

バーモント州の紅葉の様子

次に二つ目の大きなテーマである社会環境学習について報告する。僕は滞在中、「多様性」という言葉の意味を考えながら生活をした。まず最初に気づいたことはアメリカ国旗が多いこと。本当にどこを歩いても目に入ってくる。日本では想像できない光景だった。また、黒人差別を訴える旗も多くあった。それには Black Life Matters*4（ブラック・ライフズ・マターズ)、黒人の命は大切だ、というスローガンが記されていた。どこか他人事のようだった人種差別が目の前に現れた気がした。元々関心はあり、自分で調べ学習を行っていたが、現地でその側面を見るのと見ないのでは感じるものが全く違った。その旗は至る所に掲げられていた。図書館、学校、市役所などだ。10 月 8 日にホストブラザーの John と一緒に初めて学校に行った。そこで最初に目に入ったのも Black Life Matters のサインだった。John の通う Burlignton high school では、黒人生徒も少なくなく、その生徒たちはこの旗を見て、どのように感じるのかや捉え方が気になった。ポジティブな捉え方をするのか、はたまたネガティブに捉えるのか。本当に人それぞれだと思う。また、LGBTQ の権利を訴えるレインボーフラッグ*5 も多く目に入ってきた。

僕が仲良くなった現地の高校生の中の二人はフランス系アメリカ人だった。バーモント州の北端はカナダのクベック州と隣接しているので、フランス語圏の人達も予想以上に多く、フランス語でも話してみた。少し調べるとバーモントという州の名前自体、vert 緑 mont（山）というフランス語で「緑の山」という意味で、そこからバーモント州は Green Mountain State という愛称でよく呼ばれることも知った。また州都はモンピリア (Montpellier、ちなみにフランス語読みだとモンペリエ)で、僕の父の友人が住んでいる南フランスの街の名前と一緒なので親近感を覚えた。他にも Lake Champlain の Champlain は発見したフランス人の探検家*6 の名前をとって付けられた。このようにフランスとの結びつきを強く感じた。

さらに、大統領選挙*7 直前に渡米したこともあり、選挙ムードを生活する中で感じることができた。日本との大きな違いは、一定数の住民がどの候補者を支持しているかを大々的に公言していることだ。自分の家の前にヤードサインと呼ばれるものが置いてある。そこには支持している候補者の名前だけが書かれている。日本は名前の後ろに候補者の顔が必ず印刷されているが、名前だけなのは個人的に好印象だった。

このように、アメリカは「メルティングポット」や「サラダボール」と呼ばれるほど様々な人種、国籍、言語、性的志向が異なる人々が暮らしていることが実際にわかった。僕が今回あって時間を過ごした人たちが、いかにしてお互い気持ちよく共存していけるか、その解決を探っている様子がわかった。特に、教育や自然環境づくりに関して学ぶことがたくさんあり有益な時間が過ごせた。

ホストブラザーの John との写真

左から僕、僕と一緒のプログラムで参加したともくん、John、ともくんのホストブラザーの Tristan(上の写真も同様)

このレポートの最後にこのプログラムに関わってくださった鳥取県教育委員会の方々、バーモント州で僕たちを受け入れてくれた Green Across The World の方々、そしてホストファミリーの John と Annie に感謝を伝えたい。１５歳にしてこのような機会を頂き、本当に貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

※1、※2 鳥取県国際交流財団と GATW の交流協定の締結

「鳥取県・バーモント州青少年交流事業」は、当財団とバーモント州に拠点がある Green Across The World（略省：GATW）がカウンターパートとなり、実施している。GATW は世界の国々と交流を通じて文化理解と環境に対する認識を深めることで国際交流を推進している NPO 団体である。2018 年 7 月に鳥取県とバーモント州政府が姉妹協定提携書に調印したのを機に、今後の交流の一層の発展を期し、「環境学習を通した青少年交流」に関する協定を締結した。

http://www.torisakyu.or.jp/ja/1/koryu/1262/

鳥取国際通信 No.128 Dec.2018 参照

※3 Keeping Track とは、Susan Morse さんが行っているプログラムであり、内容としては実際に山の中を散策し、生態系や自然環境について学ぶ。毎年バーモント州以外の子どもたちも大勢参加している。

Keeping Track について

https://keepingtrack.org/sue-morse-backgrounder

Susan Morse さんについて

https://ecosystems.psu.edu/research/centers/private-forests/outreach/conferences/2017-

private-forest-landowners-conference/2017-conference-key-note-speakers/susan-morse

※4 Black Life Matters　略して BLM と呼ばれるムーヴメントが誕生したのは 2013 年。その頃市民活動家としてすでに活躍されていたアリシア・ガーザさんは 2013 年 7 月、前年にフロリダ州で黒人の高校生トレイヴォン・マーティンさんを射殺した男性に無罪評決が出た際、SNS 上で怒りの心境を吐露した。その中に出てきたのが「Black Lives Matter（黒人の命は大切だ）」という言葉である。友人のカラーズさんが#blacklivesmatter をシェアすると、ハッシュタグは瞬く間に拡散した。そして 2020 年夏、コロナ禍のアメリカ合衆国で、ブラック・ライヴズ・マター（BLM）運動と呼ばれる抗議デモが再燃した。直接の契機は 5 月下旬にミネソタ州で黒人男性のジョージ・フロイドさんが白人警官に殺害された事件だが、その前後にも黒人が警官に射殺される事件が多発していた。8 月にはウィスコンシン州で新たな警察暴力事件が起こり、大坂なおみ選手などアスリートによる抗議運動も広がった。背後から 7 発銃撃されたジェイコブ・ブレイクさんは、一命はとりとめたものの、下半身不随となった。ある統計によると、近年の警官による殺人のうち、黒人が犠牲となった比率は白人の約 2･5 倍。また、黒人が逮捕され収監される比率は白人の 5〜6 倍で、これは黒人男性の 3 人に 1 人、トランスジェンダーの黒人女性の 2 人に 1 人が一生に一度は刑務所を経験し、黒人女性の 2 人に 1 人が伴侶を収監された経験を持つ計算である。

https://www.jinken-net.com/close-up/20220104_2860.html

立命館大学 文学部 国際コミュニケーション学域 教授

坂下 史子 （さかした ふみこ）氏の文章の抜粋

※5 レインボー・フラッグ

セクシュアル・マイノリティの頭文字から構成されている言葉 LGBT ですが、L（レズビアン）G（ゲイ）B（バイセクシュアル）T（トランスジェンダー）の尊厳（プライド）のシンボルとしてのレインボー・カラーは、通常の 7 色ではなく赤、オレンジ、黄、緑、青、紫の 6 色で、LGBT コミュニティの多様性を表す。
https://www.outjapan.co.jp/pride_japan/glossary/ra/1.html

フランス人の探検家*6 サミュエル・ド・シャプランが湖（現在のシャプレーン湖）を発見

し、1666 年にフランス人が湖上の島に住み着いたのがバーモント州の開拓のきっかけだといわれている。ちなみに 1791 年に 14 番目の州としてアメリカ合衆国に加わったバーモント州の人口は 50 州中 49 位とワイオミング州の次に少ない。

https://www.ryugaku.ne.jp/state/entry/id/99

大統領選挙*7　共和党
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%B1%E5%92%8C%E5%85%9A_%28%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD%29>を支持する傾向がある州を赤い州（red state)、民主党
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%91%E4%B8%BB%E5%85%9A_%28%E3%82%A2%E3%83%A1%E3%83%AA%E3%82%AB%E5%90%88%E8%A1%86%E5%9B%BD%29>を支持する傾向がある州を青い州（blue state）と呼ぶことを学んだ。バーモント州は blue state で今回の大統領選もハリス氏を支持した。

「令和６年度鳥取県・バーモント州
青少年事業参加レポート」

鳥取西高等学校　２年　安治智成

テーマ（自然環境）

「バーモントの人の環境意識と野生生物の保護」

鳥取県とバーモント州はともに面積の 7 割以上を森林が占めていることや、多様な生物が生息していることで共通していると思いますが、バーモントの人と鳥取の人の環境に対する意識には、あるいは環境破壊に対する切迫感ということもできるかもしれませんが、違いがあるように感じました。

私達は Susan Morse さんという方のされているキーピングトラックに参加し、野生生物の痕跡（爪痕など）を探索しました。その中で Susan さんや現地の参加者の方と環境問題について話をする機会があり、彼らは、ただ人間だけが生物間のつながりから離れて破壊を行っていると話していました。また、Susan さんは私達に 1 列で歩くように指示し、できるだけ小さな生物や植物を傷つけないようにしていました。このような徹底した考え・方法が日本にあるのか、あるいはそれらが日本で広がる素地があるのかを考えると、疑問符がつくのではないかと考えました。

このような活動はキーピングトラックのみで見られたわけではありませんでした。ホームステイ先の一般家庭でもコンポストが行われていました。コンポストとは家庭で出る生ゴミを

堆肥にして土にかえすことで、近年日本でも注目されていますが、一般家庭で普通に行われているほど広がっているとはいえないと思います。
また、バーモントを移動しているとよく太陽光パネルを見かけました。
バーモントでの滞在を通じて感じたことの一つに自然の近さがあります。街と森が別れているのではなくつながっているような印象を受けました。他にもバーリントンを移動するときはいつもシャンプレイン湖が見えました。このような自然との近さが環境への意識の違いに影響を与える一つの要因になるのではないかと思いました。また、そのような自然によって紅葉のシーズンには人口の何倍もの人がバーモントを訪れ、観光にも生かされているそうです。（ホストファミリーは街が混むことに不満があるようでしたが）このように鳥取でも自然との近さ、街と自然との近さによって自然に対する意識を高めるとともに、観光にも活かすことができれば良いのではないかと思います。これは海外の環境意識の高い富裕層を呼び込む戦略にもなりうると思います。

⇑キーピングトラックの様子
（左の人物が Susan Morse さん）

⇑ソーラーパネル（移動中によく見かけた）

⇑Ethan Allen Tower から見たバーリントンの様子
木が目立つが、その下は住宅地

⇑シャンプレーン湖

テーマ（社会環境）「移民、難民」

アメリカは人種のるつぼ、移民の国だと習いましたが、現在は移民問題を抱えており、2024 年のアメリカ大統領選でも論点の一つとなりました。僕達がバーモントに行っていた間は大統領選の真っ只中で、民主党が強くリベラルな土地柄と言われるバーモントではハリス候補への支持を表明している家が多かったように感じましたが、それでもトランプ氏への支持を表明している家も見られました。

また日本でも難民の受け入れについてその厳しさ、入管施設での人権侵害などの問題があります。

このような情勢の中で、移民・難民に対しての情勢はどうなっているのか調べようと思い、このテーマを設定しました。

研修の中でバーリントン高校に行ったのですが、そこで感じたのはやはり多様な人がいることと、そのような多様な人を受け入れようという積極的な態度でした。高校や街には Black Lives Matter の旗が掲げてあるなど多様性や平等について積極的な態度を感じました。日本ではそのような言動は「政治的」とされて口に出しにくい風潮があるように感じます。そのことが日本での難民の問題が見えにくくなっている、議論が活発にされていない原因の一つではないかと思います。

バーリントン高校に行った日の放課後に、ホームステイ先のホストブラザーの友人が訪れてきました。彼はアジア系の移民でした。彼によると、「バーモントでは移民だから何かをするな、というふうに制限されることはないが、他の地域ではそうでないかもしれない。バーモントが暮らしやすい理由は、コミュニティや組織が生活などの面倒を見てくれているからだ。」ということでした。

ホストマザーとバーモントのリベラルさについて話していたとき、バーモントは高齢化が進み、白人が多い地域でありながら、リベラルな考えを持つ人が多いのは他の地域と異なった点だと言っていました。また、バーモントでもトランプ支持者のような保守の人々は確実に存在しているとも言っていました。（前に述べたようにトランプ支持を表明している家もありました）今回の研修で移民・難民問題について身近に多様なバックグラウンドをもつ友人や近所の人、道ですれ違う人を持っているか、持っていないのかで、新たに人を「私達」として受け入れることができるかどうか変わってくるということを実感しました。その一方で、移民に対して差別的とも取れる発言をするトランプ氏への支持が広がっている現状（そしてその当選）からは不安も感じる事になりました。日本では移民・難民やマイノリティの人々が実際にいるにも関わらず普段の生活では見ることがなく、また問題に関心が低い、あるいは避けていることで、活発な議論が行われていないことが問題の原因にあるのではないかと思います。

⇐バーリントンのチベット料理屋

チベット系の住人も生活している

⇐バーモント州の議事堂にあるネイティブアメリカンの像

⇐バーリントン高校で見つけたポスター

「私達のアメリカでは、

すべての人は平等である

愛が勝利する

黒人の命が大切にされる

移民と難民が歓迎される

女性が自身の身体を管理する

利益よりも人と地球を大切にする

多様性が祝福される」

まとめ

今回のバーモント研修は僕にとって初めての事だらけでした。海外に行くのも初めて、10時間を超えるフライトも、ホームステイも、スケートも、何もかもが新しく、自分が入れ替わってゆくように感じることができました。特に高校では普段生活を送っている場所であるだけに、その違いをはっきりと感じました。制服がなく、1時間ごとに駅の構内のように生徒全員が移動し、授業中に菓子を食べる。これまで当たり前過ぎて当たり前だとも思わなかったことが、当たり前でないことを知ることができました。それを通じて得た視野はこれから生きて何かを考えるときに役に立つと思います。

アメリカに着いて感じたのは、やはりその多様な、無秩序で整った、開放的な雰囲気でした。いろいろな肌の色をして、いろいろな訛の言葉を話す。日本ではそこまで雑多な混じり合った開放感を感じることはめったにありません。その雰囲気を感じて育つかどうかで考え方も変わってくるのではないかと思いました。

日本の文化の広がりを感じることもありました。バーリントン高校では漢字やひらがな・カタカナの入ったTシャツを着ている生徒がいたり、アニメが好きだという生徒がいました。ホームステイ先には柔道や合気道をしている人がいました。日本のお菓子が売られているのも見ました。このような日本の文化を海外で感じると、日本にいるときよりもなぜだか誇らしく感じました。

ホームステイ先ではホストファミリーのおかげで楽しい時間を過ごすことができました。少し困ったことは、〇〇がいるかどうか質問されたときに、日本語と同じように「大丈夫」という意味のことを言ってしまうことでした。まだ会話がスラスラできるほどの英語力を身につけることができていないことを実感できたので、勉強を頑張るモチベーションが増えました。

今回の研修を通じて考えたことを現在学校で行っている課題研究に活かしたり、多くの人に体験を伝えることで発展させていきたいです。

令和６年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート

米子工業高等専門学校　２年　實近　はるの

テーマ（自然環境）「生態系について」テーマ（社会環境）「教育について」

はじめに、近年では環境問題について注目が集まっている。またそれらの問題を解決するための教育システムの改善も大きな問題だろう。よって本レポートでは上記の通り自然環境ではバーモントでみられる生態系について、社会環境ではバーリントン高校をはじめとした教育機関や施設での教育について自身の体験をもとに考える。

テーマ（自然環境）：バーモント州の生態系

私は、このテーマについて、主にバーモント州で行ったキーピングトラックやバーモント大学関連施設での体験をもとに考えた。ガイドのスーさんの話では木の間隔が違うだけで生態系が大きく変わることが分かった。これは日の当たり具合で植物の生息具合や葉の色付きなど環境が変わるからである。ブラックベアに焦点を当てて考える。バーモントの山にはブラックベアが生息しておりその痕跡として木の幹に引っかき跡を見つけた。これは個体によって違いがあり熊同士で縄張りを主張したりパートナーを探したり、その他の動物との争いを避けるのに役立つ。ここから生態系の中で必要のない争いによって個体数を減らしたり、逆に生態系の偏りから個体数が激増したりすることがないようになっていることがわっかった。またこういった生態系に人は手をかけすぎず、

観察を続け最小限のサポートで生態系の保護につなげることが大切だと考えた。次にバーモントの自然の中や街中で多くみられる鳥類に焦点を当てて、鳥類に関する展示施設とバーモント大学での体験をもとに考える。バーモントには約５００種以上の鳥がいる。自然界では優位な遺伝子が残っていく傾向にある。それに従って鳥も住処やえさによって体の形状を変え適応してきたという話を聞いた。その話から私は、人間の暮らしやすさを求めすぎることによって生物の住環境を大きく変えたり、えさとなるものの数を大きく変えたりすることがあってはならないと考えた。上記した２つの視点での考察よりいずれにせよ人間の手によってどんな変化が現れるのかに最大限注意を払い、観察を続けることで影響を最大限抑えることが大切だと考えた。鳥取県でも生物について学べる機会が増え観察の機会があると、人々の関心を持ってもらいやすく全体的な生態系に関しての意識に繋がり、環境保護活動の実効性も高まると考えた。

ブラックベアのマーキング跡

バーモントに生息する鳥

ランプレー

フクロウの一種

テーマ（社会環境）：教育について

私はこのテーマについて高校体験をしたバーリントン高校や大学関係施設での取り組みに関する体験をもとに考える。まず高校体験で学んだことについて、授業を体験して初めに気づいたことは自主性と考えの尊重についてである。この学校では体験したどの科目でも挙手をすることで意見や疑問を掘り下げることができる。そしてその意見が否定されるとはあまりないように感じた。要因として、日本では一つの正解を求めることに重きを置いているが、アメリカでは個人の意見が正解の一つ、もしくは正解につながるものだとして全体に受け入れられやすい環境にあることが大きいと感じた。また授業科目、とくに AP 科目が興味深かった。これは高校在学中にカレッジレベルのクラスを取ることができて自分の得意な部分を伸ばせるシステムである。私の通う工業高専でも工学について高校生の年齢から大学レベルの授業を受けることはできるが、文系には

対応しておらず一般的な高校でもそういった授業は取り扱いがないので、もっと日本でも普及すれば、個人の長所を生かした、より多くの若い世代の将来につながると考えた。

次に注目したいのは、大学関係施設による特に若い世代への教育システムである。バーモント大学が環境学に強いことは有名だが若い世代の実態について気になったので調べた。海洋系の大学関連施設では大学生との共同研究だけでなく、小学生などの若い世代に講演や体験を提供し自然環境に対しての関心を高めていると聞いた。また研究施設の上階では小さい子供向けの体験施設があり、訪れてみると科学館のようになっていた。そこでは自然現象を自分で発生させることができ、仕組みを学べるとともに詳しい解説がついた。ほかにも科学史や地元企業についての展示もあり幅広く学べる施設になっていた。こういった取り組みは小さいころから環境に対する関心を高め、不足しがちな技術者の育成につながり高等教育においてもユニークな強みにつながり効果的でよいと思った。鳥取県にはこれほどの体験型施設はないので、私の学校の強みである工学と教育提携を生かした体験会に参加し、この事業での経験を生かして学内学外ともに活動を広げていきたいと考えた。

高校の選択科目　オーケストラ⇒

体験方科学館　ECHO　の設備

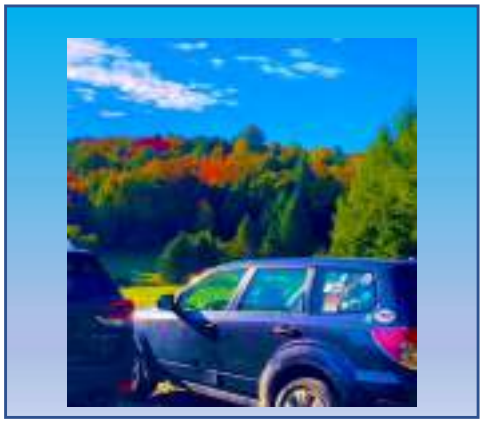
おわりに、高専生である自分に深く関係するテーマについて掘り下げたが、私ができることは思ったよりも多く、これからも学び続けるとともに活動の規模を広げ次世代にもいい影響が与えられるよう進歩していこうと強く思った。

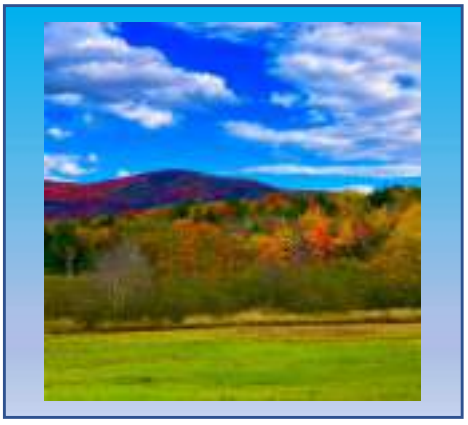
最後になりましたが有意義な体験をいただきました鳥取県ならびに引率の方々、Green Across The World の皆様、ホストファミリー、事業を共にしたすべての関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

１０月３日から１０月１４日までの１２日間、青少年交流事業に参加しアメリカのバーモント州で自然環境や社会環境について学んできました。生活、文化、教育などの違いを自分の目で見て、感じることができとても充実した時間を過ごすことができました。

自然環境 ： 住民の自然との関わり方

四日目にキーピングトラックに行きました。キーピングトラックでは動物の足跡や、熊のひっかき傷の跡など普段見ることのできない生態系をたくさん見ることができました。まず、山に入る時にガイドさんからなるべく植物を踏まないようにするために、前の人の足跡の上を歩くようにと説明がありました。今まで私は山に入る時にあまり足元の植物について意識したことがなかったので、その説明を聞いたときは驚きました。しかし、生態系を守るためにはとても大切なことだと気づいたのと同時に、知らないうちに自然を壊してしまっていたのかもしれないと感じ、知識を深めることの大切さに気付かされました。キーピングトラックでは専門用語がとても多く、聞き取ることが大変でしたが実際に見たり触れたりすることで学ぶことができました。





私が特に印象に残っていることは二つあります。

一つ目はギャップについてです。

ギャップとは

太陽の光が木の葉によく当たるようにするためにできた隙間のこと。

ギャップのメリット

日光がたくさんの植物に届く

↓

樹種が豊富になる

↓

多様な生物が生息できる

～キーピングトラック中に見た生態系～

オオサンショウウオの赤ちゃん	ギャップのために倒れた木	熊の毛と引っ掻いた跡

二つ目は先のことを考えて作るということです。

山の中を歩いていると大雨が原因で溝が壊れてしまっている部分がありました。それは昔の人が溝を作る時に先のことを想定していなかったからです。その失敗を踏まえて、アメリカではなんと７世代先を想定してものを作ることを心掛けているそうです。また、中国においては７世代前と７世代後の計１４世代のことを考えていると知りとても勉強になりました。

例）建物を建てる→**7 世代先**を想定

想定される災害

□大雨

□竜巻

□地震

□津波

□土石流

７世代先も壊れずに安心して使うことができるように

『先を見据えることの重要性』

つまり、「過去から学び、未来のために、今自分たちができることをする」というＳＤＧｓに通じる考え方がそこにあり、改めてその考えに強く共感しました。

自分さえ、自分たちさえ良ければいいという自己中心的な考え方では世の中は決して成り立ちません。例えば、私たちの生活に欠かせない石油はあと 50 年で使い切ってしまうそうです。私たちが未来のことを考えずに使ってしまうと無くなってしまいます。昔の人たちのお陰で今の私たちが助かっているように、私たちも未来を想い行動をすることが大切だと感じました。

未来のために限りある資源を大切に使う

例）水　→　こまめに水を止める
食器についた汚れを拭いてから洗う
お風呂の残り湯を活用する

エネルギー消費を節減するために私たちにできること

・リサイクルを積極的に行う
・有害物質が含まれているものを購入しない

今回の研修を通して環境を考えるということは、人のことを考えるということだとよく分かりました。ホストファミリーもエセックス高校の皆も、先を考え環境保護に取り組んでいるバーモント州で出会った人たちは、実際人にもとても優しい人たちばかりでした。

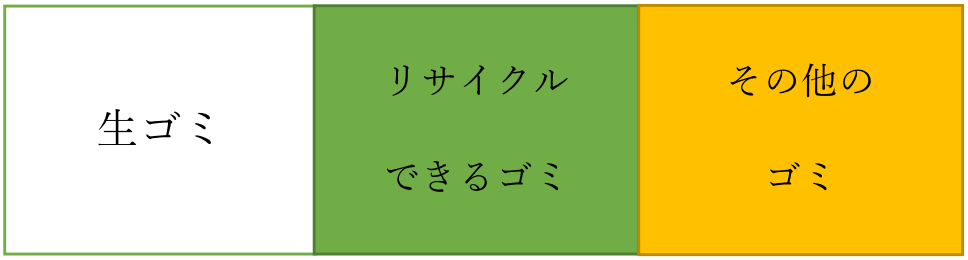
鳥取や日本全体がそうなっていけば、より素敵な国になっていくのだろうなと思いました。

社会環境: 生ゴミの堆肥化

バーモント州は、生ゴミの堆肥化が義務化されており環境意識が高い地域です。鳥取県は平成 25 年度に「とっとり流生ゴミコンポスト実践マニュアル」を作成しているものの生ゴミの堆肥化などはまだまだ浸透していないということが課題として考えられます。

そこで私は、バーモント州の家庭ではどのようにして生ゴミの堆肥化を行っているのかを調査しました。

私のホストファミリーの家では、ゴミを三種類に分けていました。



また、私の行ったエセックス高校でもゴミが 3 種類に分別されていました。

生ゴミがある程度溜まったら
専用の機械に入れます。

数時間後

ゴミが堆肥化されました。

外にあるゴミ箱に入れます。

この堆肥は家庭菜園に活用されます。

生ゴミの堆肥化を義務化することで街の自然は守られているのだと感じました。
バーモント州の方々はこの取り組みに積極的に取り組んでいて素敵だなと思いました。
してもしなくてもいい状態だと、人はどうしても楽な方を選んでしまいます。
しかし、義務化にすることで一人一人の環境意識が高まり、習慣化することに
繋がるのだと感じました。

お休みの日🌱

休日はホストファミリーと一緒にお買い物に行ったり、農場に行って野菜の収穫をしたり、家で一緒に映画を見たりゲームをしたりして過ごしました。

収穫したお野菜🥕

ホストシスターのオリビアは

毎週土曜日は農家にお手伝いに

行っているそうです。

ジャック・オ・ランタン作り🎃

私がずっと作ってみたかったものです！
大きなカボチャを畑に取りに行きました。
日本ではこんなに大きなカボチャを見たことがなかったので新鮮でした。中身をくり抜いて作るのも楽しかったです！！

～まとめ～

バーモント州の方々は環境問題を自分ごととして捉えているのだと感じました。住民の方々と一緒に収穫した野菜は家で食べたり、近くのスーパーで販売したりしていて地産地消も盛んに行われていると感じました。コンポストは環境に良いだけでなく、人々の健康にも良い影響があるということを知りました。

◆鳥取県でできること

街の自然環境をよくする

⬇

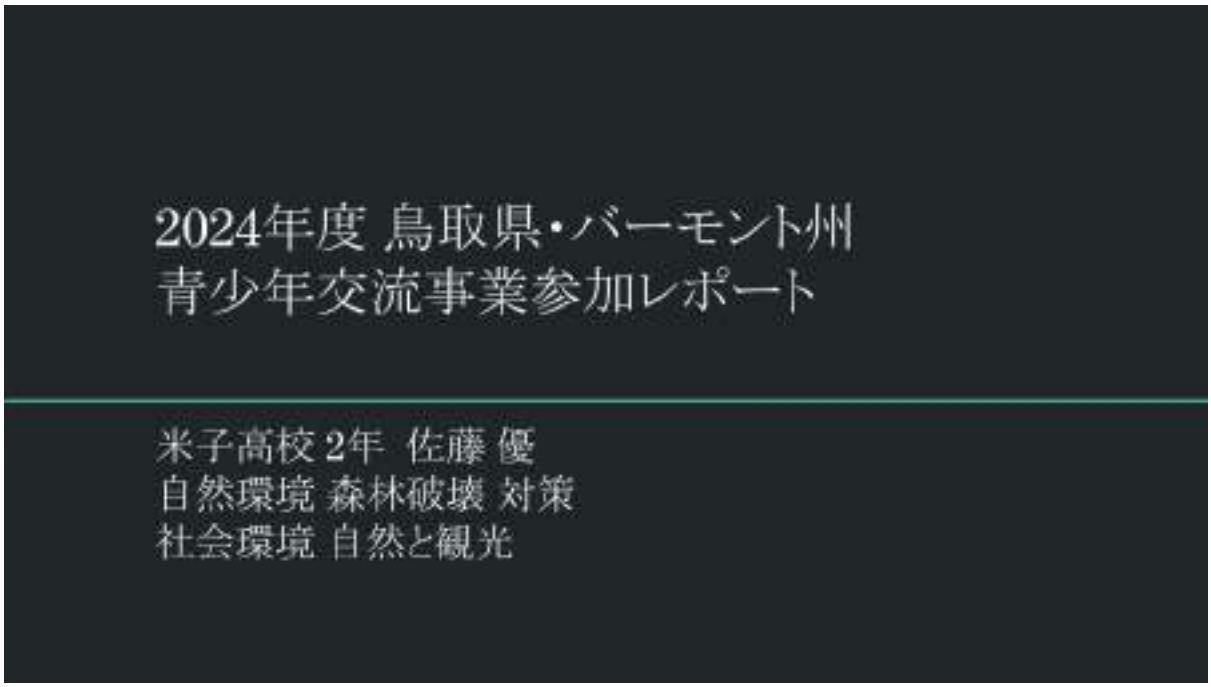
地産地消を進める

⬇

健康に繋がるということを発信する

「鳥取県を自然にも体にも優しい街」として
住みたくなる魅力ある街にしていきたいと
思っています。

ご清聴ありがとうございました。



米子高校、2 年生の佐藤優です。私は 2024 年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業に参加してきました。環境学習、文化学習ともに異文化交流や体験学習を通して自分の考えを深めたり、新たな知識を蓄えて、広げたりしたいと思いこの事業に参加しました。今からバーモント州に行って学んだことを自然環境のテーマ、森林破壊と対策、社会環境、自然と観光に基づきながら説明していきま
す。

最初のバーモント州のイメージは鳥取県と同じような田舎だと思っていました。事前調べでは、人口がアメリカの中で二番目に少ない、面積が五番目に小さいなど、鳥取県と似ているところがあるなと感じていました。また、メープルシロップが有名、自然豊か、一年を通して寒い、降雪量が多いなどのイメージがありました。実際のバーモント州は田舎だけど観光

地としてとても有名で、人口が少ないと感じられないほど人がたくさんいて、とても賑わっていました。自然は私が想像している以上に豊かで、街で歩いていたら、リスに何度も遭遇するという体験をすることができました。そして、紅葉が綺麗でした。日本では見ることのできない季節に見れて季節の流れの速さに違いを感じました。また、メープルシロップが有名で、どこに行ってもメープルシロップが売ってありました。休日には、シャンプレーン湖の周辺でサイクリングをしました。その時に、自転車用道路、歩行者用道路があり、市民の健康や観光客に向けて作られているのではないかと思いました。そのため、地元の方々は、シャンプレーン湖の周辺で自転車にたくさん乗ったり、ジョギングをしたりしておられました。国籍やジェンダーについてとても寛大で、「誰が誰を愛するかは自由だよ、バーモントは他の州よりも宗教や国籍も性別も気にしないよ」とホストマザーがおっしゃっていました。治安が良く、夜に犬の散歩に出かけることもできました。しかし、ダウンタウンにはホームレスがいたり、工事している場所が多くあり、少し不安に感じることもありました。学生はバスに無料で乗ることができたので、高校にはバスで通いました。また、一部の学生は自転車を持っていたので、バスの前の部分に引っ掛けていて、私の町のバスにも取り入れてほしいと思いました。ホストファミリーのお家では、政治についてや戦争についても話しました。実際にどう思っているのかについて聞いたことによって、今までの偏見がなくなりました。また、ニュースで見るインタビューと違い、直接聞けたことがとても新鮮でした。

バーモントでは、動物は狩猟されたり、罠にかかったり、嫌がらせを受けたりすることはありません。これは、他の狩猟や捕獲が行われている地域とは対照的です。その結果、バーモントでは動物がより豊富に生息し、日本のような動物が住むところと人が住むところの区別がなく、より人目につきやすく、共存していました。これによりセントマーキングの動作をよりよく観察できました。説明をしてくださっていた方がトレイルマスターカメラで撮影された少なくとも 25 年前の写真を持っておられると説明されていました。セントマーキングとは、匂いのほくろと言い、ブラックベアが縄張りを張ったり、パートナーを探したりするために木に匂いをつけることです。

①は、サンショウウオ(Salamander)です。見た目がとてもトカゲに似ていました。彼らは、池でエラを張って泳ぐ幼生として始まり、繁殖可能なオリーブグリーンの成虫になる前に 3~7 年間さまよう陸生の幼生に変化します。一部の場所では、この種は地上期をスキッ

プして、エラを保持したまま幼虫から成虫に直接移行することができます。サンショウウオを触る際には、手に水をかけて湿らせておく必要があります。虫除けや日焼け止め、特定の薬などの物質を手につけて動物を扱わないように警告されました。これらは両生類にとって有害である可能性があるからです。両生類は赤い陸生の姿で陸上を何キロも歩き回ることができ、山の尾根から別の尾根へ移動する記録があります。また、興味深い特徴があります。それは、攻撃されたときに簡単に尻尾を折る能力です。尾はくねくねと動き続け、サンショウウオが逃げている間、捕食者の注意をそらします。②の写真は、ボブキャットです。ボブキャットは日本名でオオヤマネコです。他の動物とは異なり、ボブキャットは子育ての責任を共有しません。そのため、一部の種とは異なり、雄のボブキャットは子育てに参加しません。メスのボブキャットは、地面の下や張り出した覆いのような保護された場所で出産し、最初の数日間は子猫を暖かくしておきます。繁殖期は2月下旬から3月で、子猫は通常5月に生まれます。4月から6月上旬に生まれることもあります。③の写真はアメリカグマ（ブラックベア）です。その右の写真は爪の跡、クマが樹皮を取り除いた噛み跡、そのときについた毛がついていた木の写真です。メスのクマが木に印をつけに来て、大きなオスのクマも印をつけています。黒い痕は噛まれた跡が残ったもので、クマが長い時間をかけて残した痕跡です。

森林管理慣行の対比

上の写真からは木が倒れていることがわかります。この倒れた木々はギャップを(隙間)木々の間に作り、そこから日の光が差し込むことで新しい生態系が生まれます。アメリカの森林に枯れ木が放置されているのを見て驚いたというドイツ人観光客の方のお話を例に上げ、ドイツの「クリーンな」森林管理の実践と対比しておられました。森林生態系におけるこの自然循環はとても重要だとおっしゃっていました。森林管理に関するヨーロッパ、特にイギリスの視点について、ヨーロッパ人はしばしばアメリカの森林における「廃材」の量を過剰とみなし、この材料の生態学的重要性を十分に理解していないと指摘されておられました。

イエローバーチの繁殖戦略

イエローバーチとは日本語でキハダカンバという木です。種子は切り株や丸太のような高い場所で発芽することができ、地上レベルの病原体を避けるのに役立ちます。この能力は、この種が古い森林で成功するために重要です。私たちは、イエローバーチの再生を支援するために、古木林と木質構造を維持する必要があります。

休日には、シャンプレーン湖の周りをサイクリングしたり、ジョギングをしました。
山道を越え、歴史ある村々を巡る景色の良いドライブは、美術館、アートギャラリー、アンティークショップ、田舎の雑貨店へとつながっています。世界に誇れる職人たちのスタジオを訪れれば、彼らの傑作を鑑賞できます。屋外彫刻公園の見学や、歴史あるダウンタウンでのパブリックアート鑑賞もおすすめです。史跡や博物館の解説はわかりやすく、ニューイングランド地方の歴史に詳しくなれます。夏の終わりには、伝統的な郡のお祭りや、州内各地のイベントで秋の収穫シーズンを祝うことができます。鳥取県も大山の紅葉を楽しむことができるので、フェスなどを紅葉が綺麗居見える場所で行ったり、人が集まりやすい場所で行ったりすることで、地元の方々や観光客の方々が集まってきてくださると思いました。また、バーモントのダウンタウン周辺では、土曜日にバーリントンファーマーズマーケットを開催しており、沢山の人々で賑わっていました。また、犬と一緒に訪れている方もおられました。私の住んでいる地域では、犬を飼っている方が多いので、バーモントのようにペットと一緒に参加できるイベントを催すのも自然を活かして鳥取県をさらに発展させる方法ではないかと思いました。

学校でやる授業とは違い、実際に森の中に入って環境について教えていただくのは、とても新鮮でした。実際に熊の引っかき傷の跡を見たり、サラマンダーを見たりして、自然を直に感じながらの授業は非日常を味わいながら、私が今まで知らなかったことの発見の連続でした。バーモント州と鳥取県では、私が考えていた以上に違う取り組みが多く、鳥取県が取り入れたほうがいいと思うことがたくさん発見できました。しかし、実際に実行するには、たくさんの問題があり、コストや時間、一番は文化や周りの環境の違いがあると思います。特に、価値観が大きく違うので、そこに配慮しながらバーモントの取り組みを取り入れれたら良いと思います。学校の探究の授業で自然と観光について深めているので、バーモントで学んだことも情報として取り入れたいです。そして、より良い鳥取県を作りたいです。

令和６年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート

米子北斗高校　２年　金子真実

自然環境テーマ「バーモント州での野生動物からの人々を守る技術について」
社会環境テーマ「バーモント州の高校での情報技術の利用のされ方」

自然環境テーマ「バーモント州の野生動物から人々を守る技術について」

私は去年の６月ごろ近所の屋外施設にキツネが出没するという出来事をニュースで聞いた。そこは私自身がよく利用する場所であったため、次にそこへ行った時に何かおこるのではないかと不安になった。このことから私は森林にすむ動物が人々の住む町にまでやってくるという出来事に関心を持ち、バーモント州への派遣事業について学校の先生から伺った際にこのことについて鳥取県と自然環境が豊かという面で似ているバーモント州での対策を探求したいと思った。

街中でみられるリスの姿

キーピングトラックの様子

キーピングトラックで私たちは主にボブキャット、クマ、サラマンダーの生態や人間に与える影響、相互作用についての話を聞いた。バーモント州の森林では動物を観察するために、2台のカメラを用いて同じ動物（ここではボブキャットを示す）を異なる角度から撮影する手法が使われていた。これはアリゾナ州でジャガーの生息地を証明するためにも用いられたそうだ。

また、バーモント州の人々は動物に対して非常に寛容であり、私はバーモント州に滞在中、街中でたびたびリスなどの小動物を見かけることがあったが、現地の人々はそのことをあたりまえの風景として見ており、いたずらに小動物をつかまえようなどとはしなかった。さらに、私が滞在したホストファミリーの家には庭に野生の小鳥のための餌が用意されており、小鳥がやってきて木の実や花の種などを食べるといった様子をしばしば目撃することができた。

バーモント州全体をみても、バーモント州は日本と異なり、広大な面積の土地が存在するため、「動物がすむ場所を限られてしまった結果、食べ物を求めて動物が町のほうまで降りてくる」といった日本で起こり得る状況が少ないのではないかとも考察できた。

社会環境テーマ「バーモント州の高校での情報技術の利用のされ方」

私は以前、ほかで行われている情報技術をテーマにした事業で教育目的のアプリケーションを開発した経験があった。私はこのことがきっかけとなり、ICT 教材などに興味を持つようになった。この探究活動では現地の高校（バーリントン高校）での高校生活の体験を通じて実際に導入されている機材や情報技術の導入による生徒や教師の負担軽減、情報技術を組み入れたことによる授業形式の違いについて調査を行った。

私は現地の高校体験で、美術、歴史、文学、体育の 4 つの授業をホストシスターと共に受講し、授業の様子を拝見することができた。驚くべきことに 4 つのすべての授業で情報技術は利用されていた。美術、歴史、文学の 3 つの授業では教師が事前に作成したスライドショーによって授業が展開していた。そして、私が特に興味を持った授業は歴史と体育であった。1 つずつ説明をしていこう。

歴史：歴史の授業では生徒は事前に「各々で興味を持った奴隷制度についての映画を観る」という課題を課されており、その映画についての感想を生徒間で共有するというような内容であった。ただし、生徒は１人１台持っている専用のクロームブック（PC）を使い、ジャムボードを用いることで意見を付箋に記入して生徒と先生間で共有するという方法をとっていた。この方法は授業内容とかなり相性がよく、生徒は時間内にほかの生徒の意見を一斉に見ることができる点や、教師にとって生徒の課題管理がしやすいという点がメリットとして挙げられると感じた。

体育：体育の授業では生徒はジムでの運動を行った後、授業終了前の 15 分ほどでクロームブックによって授業の感想や、教師から与えられた健康に関する質問、授業中の運動に対する振り返りを行っていた。クロームブック内で行うことで机がないジムという空間内でクロームブック一台で授業が完結するというコンパクトさがメリットだと私は感じた。

しかし、何でもかんでも情報技術を取り入れているのかというと、そうではかった。例えば、バーリントン高校では図書室前に生徒による熊の探究活動の紙の掲示による発表が実施されていた。この活動は図書室前を通った生徒に探究活動の成果を見てもらうということを目的としているが、その際に生徒はもっともよかったと思う掲示に票をいれることができるというシステムを導入していた。現在、日本では同じように生徒による投票を行う際は極めて厳重な場合を除き、グーグルフォームなどによる情報技術を用いたアンケートを行う。しかし、バーリントン高校ではあえてアナログ的な方法で投票を行うことで、票を入れる生徒にとっても楽しい体験となっている。

バーリントン高校の図書室

図書室でのクマについての研究の掲示

これらの調査から、アメリカの高校では日本よりも早くから情報技術による教育がなされていたため、早い段階で情報技術を取り入れ、慣れることができ、結果、現時点で情報技術を取り入れるべきものとそうでないものとの違いを明確にできているのではないかと考察できた。

その他今回の派遣事業を通して

今回の派遣事業では自然環境と社会環境の２つの分野での探究活動を行ったが、そのほかにもホストファミリーと休日に行った活動などからも得られることがあった。

ハロウィーン文化について

日本とアメリカの異なる文化として、ハロウィーンという行事があげられる。ハロウィーンの文化自体は日本でも見られるが、仮装を行うことをメインとする日本の文化とは異なり、アメリカでは追加でほかの活動も見られた。例えば、私は休日にホストシスターとともにハロウィーン用のかぼちゃを掘った。また、バーリントンの多くの住宅ではハロウィーン当日の３週間ほど前から家の外装に蜘蛛の巣や骸骨などの装飾品が施されていた。

現地の学校の食事の多様化について

私は現地のバーリントン高校の見学で日本には見られない様々なものを見ることができた。その中の１つが学食の多様化である。現地の高校の学食はバイキング形式のものとなっており、自分の食べたいものを食べたい量だけ自分でとることができるといったものだった。私が見学に行った日の学食は主菜がチキンを用いた料理だったのだが、同時に豆腐で作られた似た主菜を選択することもでき、動物の肉を食べないヴィーガンなど

の人々にとっても良心的な学食だと感じた。アメリカは多文化共生社会ということもあり、多様な文化や考え方についても寛容であるということも、この学食の様子からもうかがえた。また、日本との違いについて、日本の場合、特に中学校や小学校の給食では自分の食べられないものが出てきた際にその料理を取らないことが当たり前となっている。しかし、それでは本来とるべきだった栄養素が欠けてしまうため、代用できる料理を別途用意するというのは生徒の健康面からしてもよい選択だと感じた。

これからの取り組み・活動について

自然環境について、今後はバーモント州での探究活動について経験した出来事や鳥取県との生態系の比較などについてスライドショーを作成し、通っている高校での発表を行いたい。
社会環境について、バーモント州では情報技術が現地の授業内容とうまくかみ合っていたことで効果を発揮していたが、日本の学校の授業内容でどのように電子機器を利用すれば最大限生徒が授業に集中し、授業内容を理解できるか考えたい。また、そのうえで、実現が可能であると思われたものに関しては自身の高校での導入を図りたい

米子東高校の前田蒼衣です。私は10月4日から12日間、鳥取県・バーモント州青年交流事業に参加しました。私はこの事業で自然環境テーマとして「生態系維持」を、社会環境テーマとして「子どもたちへの環境教育」を探究しました。

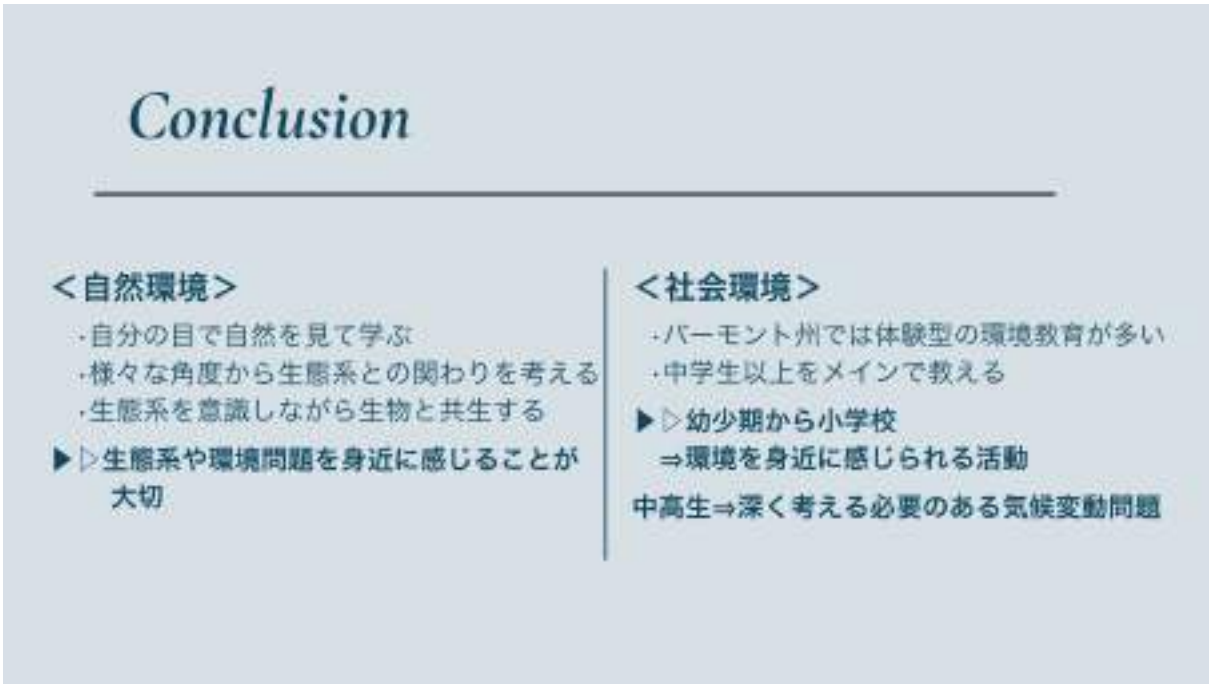
キーピングトラックでは、実際に森に入ってバーモントの森に住む生物の多様性について学びました。この写真からはギャップが見られます。ギャップとは木と木の間にできる空間から光が差し込み、スポットライトのような役割をするものであり、このギャップにより日光が差し込んだ部分に生態系が作られます。そして自然に気が倒れることで新たなギャップが形成され、別の場所に光が差し込むことで新たな生態系が作られます。このギャップ形成の仕組みにより生物が多様化しています。ガイドをしてくださったスーさんによると、「人々は生態系との関わりを考慮して慎重に木を伐採する必要がある」と話しておられ、生態系維持するためにも、キーピングトラックなどを通して自然について学ぶことが大切であると学びました。

その他にもブラックベアの爪痕を見たり、オレンジサラマンダー、ボブキャットの跡を見たりしました。ブラックベアは匂いを残すことでパートナーに探してもらうためや自分の縄張りを示すために写真のような爪痕を残しているそうです。オレンジサラマンダーは乾燥に弱いため、水を与えながら触りました。ボブキャットも木に自分の匂いを残すことで縄張りを示しているそうです。この他にもバーモントの森には様々な生物がいました。

次に、シャンプレーン湖での調査についてです。シャンプレーン湖ではプランクトン調査・水質調査・水サンプル採集を行なっています。全て船上で行なっており、私たちも船に乗り実際にプランクトン調査と水質調査を行いました。プランクトン調査では、採取した水を顕微鏡で観察しました。実際に観察してみると様々な種類、大きさのプラクトンがいました。水質調査は、透明度を測りました。透明度はプランクトンの量などで変化するため、水質の判断基準になります。シャンプレーン湖で研究を行なっているアシュリーさんによると、現在はマイクロプラスティックが大きな問題となっているため、シャンプレーン湖に流れ込むマイクロプラスティックを調べてそれらを減らす方法を調査したり、シャンプレーン湖にいる魚の食物連鎖についてや地球温暖化がシャンプレーン湖に与える影響についても調べているといいます。シャンプレーン湖の生態系を維持するために様々な角度から研究を行なっているそうです。

次に社会環境テーマである「子どもたちへの環境教育」についてです。はじめに鳥取県が現在行なっている環境教育を調べたところ次の3つがありました。1つ目は「こどもエコクラブ」です。この活動は3歳から高校生を対象としており、自分で決めた身近な環境テーマを探究するクラブです。2つ目は「やってみよう！エコ活ノート出前教室」です。これは小学校高学年を対象として、家庭で実践できる環境に配慮した活動をまとめたエコ活ノートを作成し、それを活用した出前授業を行う活動です。3つ目は「ちびっこエコスタート」です。これは幼稚園や保育園にちびっこアドバイザーを派遣し、幼児期から環境を大切にする心を育む活動です。これらの活動から鳥取県の環境教育の特徴として、幼児・小学生を対象とした事業が多く、幼少期から環境を身近に感じてもらう教育であることがわかります。一方で中高生への環境教育が少ないことがあげられます。

一方、バーモント州では次のような環境教育を行なっています。環境教育を専攻しているアシュリーさんにお話を聞くと、バーモント州では大学と連携チームを組んで主に3つのプログラムをもとに環境教育を行なっているということがわかりました。1つ目は学校での訪問授業です。連携チームとともに学校を訪れて環境問題や生物について教えているそうです。2つ目は私たちも行なったシャンプレーン湖での水上調査や森林教室です。そして3つ目が地元水族館での視察授業です。子どもたちにより環境について興味を持ってもらうために体験型の授業を行なったり、生物のことをたくさん教えたりしているそうです。また、バーモント州ではミドルスクールにあたる10歳から環境教育を始めており、年間約2000人の子どもたちに環境について教えているそうです。アシュリーさんによると、地域だけでなく地球という大きな規模で考える必要があり、さらに汚染やプラスチック問題などたくさんの問題がある気候変動について教えることが一番難しいそうです。よって、深く考える必要のある気候変動問題を扱うためミドルスクールから環境教育を行なっていることが特徴だとわかりました。



これらの調査より、生態系維持について大切なのは、まず自分の目で自然を見て学ぶこと、そして様々な角度や分野から生態系との関わりを考えて生態系を意識することであるとわかりました。そうすることで生態系や環境問題をより身近に感じられ生態系を維持するために私達ができることを見つけていくことができると考えます。
また、子どもたちへの環境教育に関しては、幼稚園・保育園から小学校までは環境を身近に感じてもらえるように現在行なっているエコ活動を積極的に実施し、中高生は深く考える必要のある気候変動問題について出前授業や体験型授業等を実施して教えていくことが良いのではないかと考えます。

次にバーモントでの思い出を紹介します。1つ目はバーリントン高校（BHS）での学校体験です。バーリントン高校は生徒の30%が移民であるため様々な人種・文化を持つ生徒の皆さんと関わることができました。また、語学も日本では英語だけの学校がほとんどですが、フランス語・スペイン語・ドイツ語・タイ語など様々な言語から自分の好きな言語が選択できとても興味深く感じました。私は数学の授業に参加しました。授業は少人数クラスで行われており、全員が発言しやすい雰囲気が作られていました。また、ビンゴを取り入れたり、正解者にお菓子を配ったりなど日本とは違う雰囲気や形式の授業でとても新鮮でした。
昼食は無料のバイキング形式の学食でとても美味しかったです。

私のホストシスターはBHSのバレーボールチームに入っており一緒にバレーを楽しみました。私自身もバレー部に入っていたため、チーム練習に参加した際はとても馴染むことができ、たくさんのチームメイトと仲良くなることができました。試合を見に行ってみて、チームメイトがたくさん応援したり、プレーでのミスをした際に優しくフォローしている姿がとても印象的で、バレーボール以外でもこのように一生懸命応援したりフォローし合えることはとても大切なことだと感じました。

放課後や週末は友達とショッピングに行って、服や雑貨を見たり、食事を楽しんだりしました。また、ホストファミリーとゲームセンターに行って遊んだりもしました。初めて出会う友達とも一瞬でとても親しくなれ、夢のような時間でした。また、私のホストファミリーはチベット系の家庭であったため、たくさんのチベット文化にも触れました。日曜日にはサンデースクールというチベット系の子どもたちにチベット語やチベットの伝統ダンスを教える教室にも参加しました。初めてチベット文化と触れ、様々な文化を教えてもらい、とても貴重な経験となりました。週末に参加したチベットパーティーには40人ほどのチベット系の人が集まり、たくさんのチベット料理を楽しみました。日本人の私にも多くの人が優しく話しかけてくれてとても楽しいひと時となりました。

その他にもバーモント州で最も有名なチャーチストリートにも行きました。ここではバーモント州発祥の有名チョコレート店レイク・シャンプレーン・チョコレートや同じくバーモント州発祥の人気アイスクリームショップベン＆ジェリーズに行きました。どちらもとても美味しく、必ずまた訪れようと思いました。

12日間バーモントに行って、初めて出会う異なる文化や価値観を持つ人とたくさん交流してみて、人と関わる大切さ、人々の温かさをとても強く感じました。これからもたくさんの人と関わり、多様な文化・考えに触れて、たくさんの経験を積み、物事を多角的に考えられる人になりたいと思います。そして今回一緒にバーモントに行ったみんな、12日間ありがとうございました。みんなと支え合いながら楽しくこの研修を終えることができて本当に良かったです。最後に、鳥取県交流推進課、Green Across the World の皆さん、引率の福田さん、入江さん、ジェマリーさん、本当にありがとうございました。

アメリカのバーモント州に約2週間行ってきました。

私がこの事業に参加した理由は主に2つあります。まず1つは、人口や自然豊かな点で似ている鳥取県とバーモント州では環境に対してどのような配慮をしているのか気になったからです。2つ目は、高校までが義務教育期間であるアメリカでは教育や個性の尊重に対してどのような考えがあるかを知り、将来の夢である教育現場で役立てたいと考えたからです。

そして上のスライドに記載してある自然環境、社会環境でのテーマで探求しました。

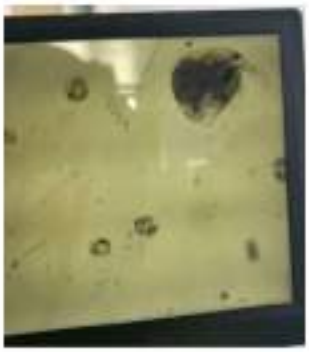
自然環境「水環境の保護と観光面での活用方法」

lake champlain

まず自然環境についてです。鳥取県には中海、バーモント州にはシャンプレイン湖といった豊富な水環境があります。シャンプレイン湖は10億年以上前にできた歴史的にとても長い湖です。そこで私はシャンプレイン湖ではどのように水環境を守っているのだろうと疑問に思い、また観光面ではどのように活用されているのかにも興味をもちました。実際に中海では、地域の方のボランティアありで清掃活動を行っています。また、クルージング体験や環境学習ができるフェアなども開催しているそうです。

シャンプレーン湖の水環境保護活動

水質・プランクトン調査



湖で取った水を顕微鏡で観察！

湖の大切さを伝える

大学と協力！

シャンプレイン湖では主に2つの保護活動が行われていました。

まず1つは水質・プランクトン調査です。実際に船から湖の水を採取し、観察してみました。そこには多くのプランクトンがいて、私達はミジンコやユレモなどを観察することができました。最近はマイクロプラスチックの影響を問題視しているそうです。この問題を解決することは難しいですが、保護活動の2つ目である湖の大切さを知ってもらうための活動がとても重要になってきます。そこでここの研究所では地域の大学と協力し研究チームとなって環境教育を行っていて、そこに子どもたちが学習しに来たり、研究チームが子どもたちのいる場所に行って学習を行ったりしています。中海でも環境教育を行っていますが、シャンプレイン湖では小さい頃からの教育という面が日々の生活に習慣づくのでとても良いことだなと思いました。

そして観光面についてもお話を伺いました。シャンプレイン湖では、カイトサーフィンやパドルボートなどのマリンスポーツを楽しむことができ、シャンプレイン湖の近くの研究所に水族館が隣接してあるのでそこでも楽しむことができるそうです。鳥取県ではマリンスポーツの他に、海上アスレチックなどがあるのでシャンプレイン湖でも実践してみてほしいです。

社会環境「バーモント州の生ゴミの処理方法」

Ethan Allen Park

次に社会環境についてです。2020年、バーモント州では米国初の生ゴミをゴミ箱に捨てることを禁止する法律がつくられました。そこで「生ゴミはどのように処理しているのだろう」、「環境に対する意識が高くないとこの法律を守れないのではないか」と思いました。

ホストファミリーに生ゴミの処理方法について聞きました。コンポストという生ゴミを堆肥化するシステムがあるそうです。堆肥化を促進するために落ち葉を入れています。コンポストを活用することで、最後は生ゴミが自然にかえり、結果的に自然に優しいということになります。日本で同じような法律をつくることは簡単ではありませんが、各自治体が補助をしてこのコンポストという仕組みを利用するべきだと思います。また、現地の人はゴミをきちんと分別して捨てていて、自らが環境のために積極的に行動していました。

この環境学習を通して幼い頃から環境教育をすることの大切さと一人ひとりがもつ意識の高さの重要性を実感しました。幼い頃から教育を行うことで環境への配慮が大人になっても習慣づいてでき、結果的に環境改善に繋がると思います。ですが、大人も自分の地域のことを知り、知識を得て、行動するということが大切です。

そしてキーピングトラックを行った時に、ピーターが “this is my teacher”という言葉を使い、私達が自然から学べることはたくさんあるのだということを教えてくださいました。

持続可能な鳥取県にするための提案

・ごみの分別強化→コンポストを導入

・環境教育を早期に始める→習慣づく、意識が高まる

私ができること

・子どもたちに向けて研修で得たことを伝える

・環境のフェアやイベントの参加

バーモント州では、一人ひとりが環境への配慮をしており、きちんと1つの問題として自らが行動していました。そこで、持続可能な鳥取県にするための提案です。どちらの提案も誰かが一人でできることではないので自治体や県で協力して動くことが必要になってくると思います。例えば、各自治体が種類別のゴミ箱を街に置いてゴミの分別を強化し、それが習慣的に行えるようになってからコンポストを導入するのも良いと思います。

また、私はこの研修で得たことを授業のような形で保育園や小中学校で伝えていきたいと思っています。そして少しでも環境への認識が高まったら嬉しいです。さらに環境に関するイベント等にも家族や友達を誘って参加することもできると思います。

環境学習以外の思い出も紹介します。ホストファミリーに博物館やハンバーガー屋さん、チャーチストリートなど様々なところに連れて行ってもらいました。お家にいた猫がとっても可愛くて癒されました。また、バーリントン高校にも行って授業を受けたのですが、向こうの高校は自由で好きな席に座ったり、お菓子を食べたり、私服で登校したり、お昼ご飯を外で食べたり、、、と私には衝撃的なことが多かったです。自由であるからこそ一人ひとりの個性が最大限に表現されのびのびと学べる空間がありました。将来的に日本でもアメリカのような授業スタイルになれば良いなと思っています。この経験や気づきは将来教員になった時のよい材料になると思いました。

バーモントで過ごす中で、伝えたいことが伝えられない、話せないという悔しさを感じました。そんな時でも現地の人は私が話すのをまってくれたり、理解しようと工夫してくださったりしました。これからもっと英語を頑張って、次ホストファミリーに会うときにびっくりさせたいです。

Thank you for watching!

I will never forget
this experience

10日間の国際交流を通して、同世代の子や様々な想いをもった人に出会ったことで、改めて人のあたたかさを感じることができました。英語での意思疎通は想像以上に難しかったですが、私のペースで会話させてくださったりと、とても親切にしていただきました。ホストシスターとお互いの国の話や、イジメやLGBTについてのお互いの考えを共有することもでき、とても充実した時間でした。

また多文化共生社会であるアメリカで生活したことで日本の多文化共生化についての考え方が変わりました。アメリカではどのようなことに対しても積極的な発言があり、それをきちんと受け止め尊重するという場面が非常に多かったです。しかし日本では周りに気を遣いすぎたり気にしたりして自分の意見を言えないことがよくあります。日本人はもっと自分の意見をもち、発言するべきだと思います。そして言い出しやすい雰囲気をつくることも大切です。そうすることで個性の尊重に繋がり、多文化共生社会に近づけると思います。

ホストファミリー含め現地の皆さん、GATWの皆さん、引率の福田さん、入江さん、ジェマリーさん、その他協力してくださった皆さん、このような貴重な経験をさせてくださって本当にありがとうございました。

この経験を私のこれからのステップにしてさらなる自分の可能性を広げていきたいと思います。

鳥取県